

山^{さん}居^{きよ}

赤^{あか}田^だ臥^が牛^{ぎゆう}

屋^{おく}外^が一^{いっ}痕^{こん}の^の淡^{たん}月^{げつ}

山^{さん}中^{ちゆう}万^{ばん}点^{てん}の^の梅^{ばい}花^か

時^{とき}に^に好^{こう}句^くを^を吟^{ぎん}じて^て友^{とも}を^を迎^{むか}え

夜^{よる}閑^{かん}窓^{そう}に^に坐^ざして^て茶^{ちや}を^を喫^{きつ}す

【作者】赤田臥牛（一七四七〜一八二二年）江戸時代中期〜後期の儒者。

延享四年生まれ。生家は飛驒（ひだ）（岐阜県）高山の酒造業。学をこのみ松平君山（くんざん）、浅井図南、竜草廬（りゆうそうろ）、館柳湾（たちりゆうわん）らと交遊。のち学塾静修館をひらいた。文政五年七月二十二日死去。七十歳。名ははじめ朱義のち元義。字（あざな）は伯宜。通称は新助。著作に「臥牛集初編」「滴水園十勝」など。

【語釈】*山居…山中に住むこと。また、山中の住居。特に、隠遁いんとん者の住居。